

多文化研と私

板垣 美砂
(慶應義塾大学法学部政治学科4年)

2025.1.7

多文化社会研究会と私の出会いは、新宿区大久保から始まりました。

2022年の冬、私は初めて新大久保駅で待ち合わせて、友人と一緒に「UFO チキン」という韓国料理を食べに行く約束をしていました。駅の改札を出て、右手に進んでいくと目標としている韓国料理屋さんがあるのですが、スマホのマップが上手く動かず、友人と私は左手の方にずんずん進んで行ってしまいました。

左手に進んで行くと、中国、ベトナム、ネパール、ミャンマー、イランなど色々な国のレストランがありました。当時の私は、新大久保駅周辺について全く知らなかったの、色々な国の言葉が混ざり合っていて並んでいるのを見て、東京じゃない別世界に来たみたいな不思議な気持ちになりました。ただ、その一方で、道の向こう側を歩いている知り合いに向かって挨拶する人や、レストランで店員さんとお客さんがフランクに話しているのを見て、地元の山口みたいな温かみのある雰囲気も感じて懐かしくなりました。

その後、UFO チキンのお店は反対側だと気づいて、慌てて引き返し、無事に美味しい食事を終えました。そして、ちょうど2022年12月頃が大学のゼミを選ぶ時期だったこともあり、「卒論は大久保についての研究がしたい!」と思いました。

大久保に関して初めてお話を伺ったのは、山本弘子先生でした。その時の私は多文化共生について本当に勉強不足だったのですが、山本先生に多文化社会研究会について教えていただき、参加することができました。そして、川村先生をはじめ、様々な方のお話を聞かせていただく中で、多文化共生に関して「互いの文化を理解する」というような精神的なことで満足してしまっていたと気づかされました。

もちろん食事をしたり、旅行をしたりして、文化を知ったり、その国を好きになったりすることは、多文化共生を目指すきっかけとしてすごく大切なことだと思います。ですが、多文化研の方々の専門的な意見を聞かせていただくたびに、多文化共創について現実的に考えるためには、ルールや制度、経済・教育の格差といった、個々人の力ではどうにもならない物理的な側面についても「もっと理解しないといけない」と感じました。

ただ、1人で法律について勉強して理解する、というのは私にとっては難しいことでした。そんな時、また多文化研のフォーラムに参加すると、在留資格や複雑な制度をととても分かりやすく親切に教えていただくことができました。

そしてこの度、多文化研が35周年を迎えられたこと、本当におめでとうございます。多文化共生に関わる様々なことが日々変化していく中で、多文化研でお話を聞かせていただいたり、

時に自分自身の考えを話して共感してもらったり、違うよと言ってもらえたりすることは有難いことだと思います。新しい知識や出会いを生んでいる多文化社会研究会がこれからも長く続いていくことを願っています。

著者プロフィール：

板垣 美砂

山口県出身。慶應義塾大学法学部政治学科。多文化研ユース所属。